

たいまつ (Sアカデミー通信)

第1号
2022/09/19

<「たいまつ」を創刊します>



早いもので、Sアカデミーも7年目に突入しました。最初は「すぐに潰れるよ」といわれましたが、勉強をする生徒と、その生徒をサポートする講師の先生方に恵まれ、なんとか頑張れています。

これから、塾生の皆さん・保護者の方への「たいまつ」というSアカデミー通信を書いていきたいと思っています。後で書きますが、私自身の仕事は塾だけでなく、他の仕事もあります。塾での仕事は基本的に夕方以降になり、それまでは他にいろいろとしています。そのため、「Sアカデミーの組田ってどんな人？」と思われたり、塾で一般的に行われる「保護者面談」はほぼしなかったり、「家庭連絡」という電話もよほどのことがない限りいたしません。今の私の状態だと、授業をするか、保護者対応をするかの択一であり、私は授業を選んでいるからです。

ただ、皆さんが勉強しているSアカデミーの塾長である私がどのような人間で、どのようなことを考え、どのようなポリシーで当塾を運営しているかはお伝えしたいと思い、「たいまつ」を創刊することにしました。

「たいまつ」という名前は、私が尊敬するジャーナリストの「むのたけじ」さんが秋田で発刊した「たいまつ」という新聞が由来です。強い雨の中でも決して消えることのない「たいまつ」のような強い炎でありたいという覚悟をこの名前に込めています。そして、皆さんにも心の中にそんな「炎」を灯してほしいという願いも込めています。

<どうしてSアカデミーを作ったの？>

「理想的な学校を作りたい」という思いが根底にあります。高校で20年間ほど教えていて、それなりに頑張ってきました。実務としては18年間で担任として過ごしましたし、教科書や参考書、専門書など共編著も含めると10冊以上にも携わり、それなりに研究もしました。しかし、「40人学級」では、一人ひとりの生徒の進捗を理解することがほぼできませんでした。

勤務として最後の学校であった成田北高校は、2年生のみ2クラス3分割で授業を行いました。26人で授業は、40人の時に比べると生徒の理解状況がかなり深まるのです。A君はこの頃、学力がついてきたとか、B君は停滞気味だな、のように分かるようになりました。

先進国のクラスサイズは20名ですから、先進国と同じような人数で授業を試みたい、という思いはずっと持っていました。これが一つ目の理由です。



もうひとつは「自習室」へのこだわりです。母校の市川学園は、図書館が充実していました。勉強できる自習室や蔵書数、今にして思えば当時の中高生にはぜいたくすぎる施設です。これは、自分で勉強しなければ学力はつかず、自分で学ばなければ成長しないという創立者の古賀米吉先生のこだわりだったようです。自分で自分を高めていくという覚悟無しには学力がつかないのです。

塾を創業したときは、今の事務室とA教室しかありませんでしたが、次にC教室を借りられたときには、あの場所を全て自習室にしたほどです。現在、生徒数の50%は自習机があり、満席になることはほぼありません。大手のように、自習室を小さくし、教室を作れば授業は増やせます。(これは塾にとっては、「おいしい」ことです) しかし、それでは本当に学力がつかないことはありませんので、1席1席がパーティションで区切られている自習室にこだわって増やしました。

<人間万事塞翁が馬>

これは、中国の昔のお話です。

中国の北端、国境の「塞(とりで)」の近くに、占いが得意な「翁(老人)」が住んでいました。あるとき、彼の飼っていた馬が逃げたので、みんなが同情しましたが、彼は「これは幸運が訪れる印だよ」と言います。そして、そのとおり、逃げた馬は立派な馬を連れて帰ってきました。そこでみんなが祝福すると、今度は「これは不運の兆しだ」と言います。実際、しばらくすると彼の息子がその馬から落ち、足の骨を折ってしまったのです。またみんなが同情すると、彼の答えは、「これは幸運の前触れだ」。息子はその怪我のおかげで、戦争に行かずにすんだのでした。



人生は、先々何が起きるか分かりません。思いが叶っても、それが結果的にマイナスになることもあれば、結果に落ち込んでも、それがプラスに転じることもたくさんあります。これは、大人であれば誰しもが経験しているでしょうし、皆さんの保護者に聞いてみれば、「分かる分かる!」となるはずですよ。

<受験勉強で何が大切か>

これは、受験でも就職でも同じです。第一志望に合格したからバラ色の未来が待っているわけでもなく、滑り止めだったから不幸になるわけでもありません。だれにも、「その先」は分かりません。

良い結果でも悪い結果でも、どちらでもプラスになる可能性があるのだから、適当にやればいいのか。

私はそれは違うと思います。確かに、努力してもそれが結果として表れるとは限りませんし、良い結果の先にプラスの未来が待っている約束はありません。しかし、「最後までやりきる」ことは、誰しもができる。学力が高くても、低くても、「最後までやりきる」ことは全員ができることです。

そして、「最後までやりきった」人たちだけが、その結果を受け入れられるのではないかと私は思います。いい結果でも、思わしくない結果でも、**最後までやりきった人だけが、その結果を受け入れることができます。**この「最後までやりきる」ということが、受験勉強でいちばん大切なのではないかとと思うのですが、皆さんはどう思いますか？

<神谷市長がお見えになりました>

9月19日(月)に神谷市長がSアカデミーにお見えになりました。たまたま居合わせた保護者の方やチューターと1時間30分ほど意見交換をしました。今



年の中学校3年生の修学旅行もできるように尽力してくださったようです。教育を取り巻く問題は、少なくとも、今日の「サプライズミーティング」では、給食や医療費の件など、現在行われている議論についての説明もありました。来年度は「習いごと応援キャンペーン」を復活してほしい!という願いもしましたが、これは千葉市独自で決められるのではなく、国の指導もあるようです。

Sアカデミー 043(306)9241 秋の入会キャンペーン中